

中学校における「ルール」「決まり」を視点とした教科横断型の授業開発

— 社会科と保健体育科の場合 —

鳴門教育大学大学院 院生 川 岡 杏 子

I 本研究の意義

本研究は、「ルール」「決まり」を視点とした教科横断型の授業を開発することが目的である。このような教科横断型の授業は、「カリキュラム・マネジメントの充実」という点からも必要だと考えられる。

本研究では社会と保健体育の教科横断型の授業を提案する。理由は、①社会科と保健体育科のどちらも、「ルール」「決まり」がそれぞれの教科の中核になっている、にもかかわらず、②社会科と保健体育科において、「ルール」「決まり」の捉え方が違うからである。これらの教科の学習目標の違いが、「ルール」「決まり」の重点としている部分の違いにつながっている。

「ルール」「決まり」を取り上げることで保健体育科や社会科の教科横断が可能となり、多面的多角的な学習につながる。

国家及び社会の形成者を育成するためにも、社会科と体育科において、

- ① 「ルールの目的を意識した検討の場」での再検討
- ② ①の検討を踏まえた上でのルールを守る意義の再検討

を行う教科横断型の授業開発は意義がある。

II 「ルール」「決まり」を視点とした教科横断型授業の可能性

1 教科横断型授業の捉え方

教科が各々に学習すると1つずつ教科の知識は得ることは可能だが、点と点で学習するため、1つの線にすることが難しい。学習指導要領総則にある「幅広い学習や生活の場面で活用できる力を

育む¹⁾」ことは、この点と点をつなげる学習ということができよう。

では、教科の枠組みから外れて、学習全体で資質・能力の育成を目指すとはどういうことなのだろうか。図1は湯口氏「これからの教科横断型カリキュラム²⁾」を参考に筆者が作成したものである。合科活用型カリキュラムの教科Bを社会科、教科Aを保健体育科にして、「伸ばしたい（発揮させたい）コンピテンシー」を「問題を見つけ、解決に導いていく」と設定した。このように、2つの教科を位置付けることで、社会科と保健体育科の学習を通じて、「ルール」「決まり」から「問題を見つけ、解決に導いていく」能力がつく単元を開発していくことができよう。

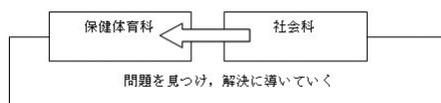


図1：合科活用型カリキュラム構成

2 社会科と体育における学習内容としての「ルール」「決まり」の位置づけ

2つの教科に共通する今回取り上げる「ルール」や「決まり」の特徴を見ていこう。学習指導要領と教科書の記述を整理すると、各教科は次のような特徴がみられた。まず、社会科の特徴は「決まりの意義」、「対立と合意」、「効率と公正」、「義務と責任」など学習する語句が1つの小項目、もしくは、語句として太文字で示されていた。そのため語句の意味や定義をしっかりと学習することが想定される。一方、保健体育科では、「ルール」や「決まり」の意義や定義を知っている前提で、それらを活用することが想定される。加えると、社会科にはない「マナー」や「フェアプレイ」に

ついでの内容が示されていた³⁾。これらのことから、社会科においては、知識・理解の側面が強く、保健体育科においては、活用の側面が強いことがうかがえる。

3 「ルール」「決まり」を視点とした教科横断型授業の位置づけ

知識だけ多く知っていても活用する力は育めない。しかし、活用するためにはある程度の知識が必要になってくる。このような活用と知識をつなげるものとして、「体験的な学習」が挙げられる。井上は、「体験的な学習」は、「知識的側面」、「価値的・態度的側面」、「技能的側面」があると指摘している⁴⁾。

本研究では、主として「知識的側面」を担う教科として社会科、主として「技能的側面」を担う教科として保健体育科に位置づけ、整理した。なお、「価値的・態度的側面」は社会科・保健体育科の双方にかかるものと考えている。

また、ここで核となる「体験的な学習」の捉えについては、ヨーロッパ評議会による枠組みを参考とした⁵⁾。以下、図2は本稿における「体験的な学習のサイクル」を整理したものである。

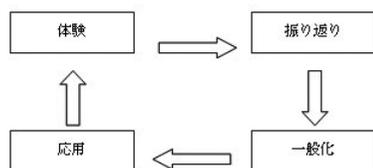


図2：体験的な学習のサイクル（筆者作成）

まず、実際にやってみる「体験」、体験したことの「振り返り」、全体で共有する。次に、振り返りを受け、実際の社会との共通点を分析し、「一般化」する。最後に、一般化で得られた気付きを現実の社会に「応用」し、実践へとつなげる。「応用」は新たな「体験」へとつながり、「体験的な学習のサイクル」となっている。

III 教科横断型の授業のための「ルール」「決まり」の実際—ハンドボールを事例に—

1 アンケート作成・分析

「ルール」「決まり」を視点とした教科横断型の

授業開発においては、ルールを検討する対象となる競技として「ハンドボール」を選定した。ハンドボールは、中学校の保健体育科で取り上げられる競技の1つだからである。

日本ハンドボール協会によると、競技規則は、序文・第1～18条(全143項)で構成されている⁶⁾。ここに示されている全143項すべて検討されることは現実的ではない。そのため、ルールを23個に精選した上で、以下の観点から、経験者13名⁷⁾、未経験者14名にLINEを利用したアンケートを踏

- A. ハンドボールの面白さを損なわず、(変更等によって)ゲームの成立に影響を与えにくいもの
- B. 中学生にとってルールが難解なものではないこと

まえ、授業で取り上げるルールを整理した。

次頁の表1は、アンケートで提示した23のルールと「A. ハンドボールの面白さを損なわず、(変更等によって)ゲームとしての成立に影響を与えにくいもの」とであると判断した、経験者と未経験者の数を整理したものである。なお、表1に示したルールは未経験者にも分かりやすいよう、表現を変更している。

まず、ルールの⑦・⑧番は、経験者も未経験者もどちらのアンケートでも多くの人が必要と感じたルールであり、ハンドボールならではのルールといえる。例えば、⑦番の「ゴールエリアには、ゴールキーパーだけが入ることできる」というルールについて、同じゴール型のサッカーではゴールキーパーしか入れないエリアは存在せず、コートプレーヤーでもゴール内に入ることが可能である。しかし、ハンドボールではゴールエリアにはゴールキーパーしか入れない点にかかるルールであり、ハンドボールの特徴を表している。⑧番の「ボールを持って3歩まで歩くことが許される」というルールについては、歩数制限に関するものである。歩数制限はハンドボール、バスケットボールのように制限があるものと、ラグビーやサッカーのように歩数制限がないものがあり、当該スポーツを特徴づけるものであるといえる。

表1：ルールについてのアンケート結果

番号	経験者	未経験者	ル ー ル (未 経 験 者)
①	6	6	競技時間は前後半各25分、休憩時間は10分とする。
②	6	4	交代しようとするプレーヤーがコートから出たならば、交代プレーヤーはいつでも何度でもコートに入ることができる。
③	11	5	不正交代したプレーヤーは、2分間退場となる。
④	6	3	ゴールエリア内では、コートプレーヤーに適用される制限は受けない。 (例：オーバーステップ、ダブルドリブル など)
⑤	6	6	プレーイングエリアにでた場合はコートプレーヤーに適用される制限を守らなければならない。
⑥	12	6	ボールを持って、プレーイングエリアからゴールエリアに再び入ることは許されない。
⑦	11	13	ゴールエリアには、ゴールキーパーだけが入ることができる。
⑧	12	10	ボールを持って最高3歩まで動くことが許される。
⑨	6	3	ドリブル後、ボールをキャッチした時、ボールが床、他のプレーヤー、またはゴールに触れる前に、再びボールに触れることは許されない。
⑩	8	6	足など膝よりも、下の部位でボールに触れたら相手のボールになる。
⑪	3	5	攻撃しようという意図を示さなければ、相手ボールになる。
⑫	7	4	攻撃しようという意思が感じられなければ、審判の合図から6回以内で攻撃しなければならない。6回を超えると相手ボールになる。
⑬	3	12	相手が手に持っているボールをひったくこと、あるいは叩き落とすことは違反である。
⑭	5	11	身体のあるゆる部位を使って相手を押しつけること、押し出すことは違反である。
⑮	2	7	相手が自由にプレーを継続できるような状態であったとしても、身体やユニホームを捕まえること。
⑯	6	9	走って、あるいはジャンプして相手にぶつかること。
⑰	2	9	明らかにボールではなく相手の身体を狙った違反に対しては、罰則を与える。
⑱	5	3	スローインを行うときは3m以上離れないといけない。
⑲	2	6	プレーが中断した場合は、フリースローで再開する。
⑳	0	5	違反して相手ボールになった場合、ボールを床に置かなければいけない。(わざと遠くに投げたら反則になる)
㉑	2	9	フリースローを行うときは3m以上離れなければいけない。
㉒	3	4	明らかな得点チャンスを妨害した場合、相手チームに7mスローが与えられる。
㉓	4	0	審判の笛から3秒以内に7mスローを実施しなければいけない。

(経験者、未経験者のアンケート結果をもとに筆者が再度集計したもの)

経験者のアンケートでは0票だが、未経験者のアンケートでは5票入っていたのが⑳番の「違反をして相手ボールになった場合、ボールを床に置かなければいけない。(わざと遠くに投げたら反則になる)⁸⁾」というフリースローに関する項目である。ハンドボール経験者である筆者もこれはルールという意識はあまりなく、床に置くのはマナーだと思っていた。自分自身がプレーする際にお互い気持ちよくハンドボールをする最低限のマナーであるという意識が経験者の回答0票になったと考えられる。

一方、未経験者が0票で、経験者が4票入っていたのが、㉓番の「審判の笛から3秒以内に7mスローを実施しなければいけない⁹⁾」という7mスローに関する項目である。このルールは、サッカーにおけるペナルティキックやバスケットボールにおけるフリースローに似ている。バスケットボールのフリースローではシュート時は、競技時間が停止している。しかし、ハンドボールは、競技時間が停止しない。そのため、7mスローの準備ができれば審判の笛の合図で競技時間が始まる。仮に3秒という制限がなければシュートを打つのに10秒使うことも可能となる。ハンドボールは3秒あれば1点獲得することができるため1点差の場面でわざと試合時間ぎりぎりまでシュートを打たないという作戦も可能となってくる。そのため、ここを意識するかしないかは勝敗に関わる。未経験者は、このルールに関わるハンドボールの駆け引きを十分に把握せず、他の球技と同様にとらえたため、必要性をあまり感じなかったと考えられる。

2 「ルール」判断場面の設定

1の分析から、23個のルールを「前提」「検討」「マナー」の3分類し、整理したものが表2である。

1つ目の「前提」に当たるルールは、授業において、基本的に改変等の検討をさせないものである。ここに位置づく5個のルールは、アンケートにおいて、経験者が多く選択したルールとなっている。このルールはハンドボールならではの特徴的なルールになっており、授業では様々な競技を

取り扱うため、その競技ならではのルールを残すことで競技の本質は失われないと想定して、経験者が多く選択したものを当てはめた。

2つ目の「検討」に当たるルールは、授業において、ゲームを行う際に必要か不必要かを考えさせる項目である。ここに位置づく12個のルールは、生徒たちで必要か不必要なのか、厳しくすべきか緩くすべきかを検討することでクラスオリジナルのルールを作成する。

3つ目の「マナー」に当たるルールは、ハンドボールを行う際に、「ルール」として守らなければいけない、罰則があるというものより、守ることで相手に不快な思いをさせず、互いに気持ちよくプレイするために設けたものになる。このルールに対し生徒はルールとして明文化するのか、マナーとして扱うのかを考える項目である。ここに位置づく6個のルールは、アンケートにおいて、経験者より未経験者の方が多く選択して、3票以上の差がついているものとなっている。

表2 授業における「ルール」の検討の方法

前提	③, ⑥, ⑦, ⑧, ㉓
検討	①, ②, ④, ⑤, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑱, ⑲, ㉑, ㉒
マナー	⑬, ⑭, ⑮, ⑯, ⑰, ⑲

(アンケート結果をもとに筆者が分類したもの)

IV 単元「オリジナルルールを作ってみよう」の開発

1 単元構成

本研究で開発した単元は、社会科と保健体育科の教科横断型の授業である。中学校学習指導要領(平成二十九年告示)社会編 公民的分野 内容A私たちと現代社会(2)現代社会を捉える枠組みと、中学校学習指導要領(平成二十九年告示)保健体育編 体育分野 第1学年及び第2学年 内容E球技と内容H体育理論に位置づく。

目標を「自分たちに合ったルール作り・実践を行うことを通じて、ルールの持つ意義や役割について考えることができる。」とした。

本単元「オリジナルルールを作ってみよう」は全7時間で構成されており、単元構成は表3の通りである。

表3 単元構成（全7時間）

時数	作業課題	学習目標	該当する教科
1次	ルールについて考える		
	①ルールについて考えてみよう	身の回りのルールや決まりを発見し、ルールの意義について考えることができる。	社会
	②ハンドボールのルールを確認してみよう	ハンドボールのルールを知ることができる。	保健体育
2次	ルール作りを体験する		
	③ルールを意識してハンドボールをしてみよう（体験）	ルールを意識することができる。	保健体育
	④みんなが楽しめるハンドボールのルールを自分で作ってみよう（振り返り）	全員が納得できるハンドボールのルールを作成することができる。	社会 保健体育
	⑤クラスでルールを決めよう（一般化）	自分の意見を発表し、話し合うことができる。	
	⑥決めたルールでハンドボールをしてみよう（応用）	決めたルールで試合を行い、ルールの意義に気づくことができる。	社会 保健体育
3次	ルールについて振り返り		
	⑦ルールの意義を考えてみよう	体験を通じて、ルールの意義や役割について考えることができる。	社会

（筆者作成）

表3にあるように単元は、3次（全7時間）で構成されている。各次の説明をしてみよう。

○1次 ルールについて考える（2時間）

第1次「ルールについて考える」は、2時間で構成されている。1時間目は、「身の回りのルールを探してみましよう」と問い、生徒が挙げたルールを「あってよかったルール」、「簡単なルール」、「なくなってよかったルール」の3つに区分させる。これにより、日常生活の中にある普段意識しないルールを取り上げ、ルールを意識させることを意図している。2時間目は、日常生活から離れ、スポーツであるハンドボールのルールを取り上げる。これにより、ルールの検討等が可能で、生徒にとって身近なものとなることを意図している。なお、ここで提示するルールは、アンケートの結果を踏まえ、整理したルールの使用を想定している。

○2次 ルール作りを体験する（4時間）

「第2次 ルール作りを体験する」は4時間で構成されている。第2次では、ルール作りという「体験的な学習」が中心となる。そこで、「体験的な学習のサイクル（③ハンドボールをしてみよう（体験）→④みんなが楽しめるハンドボールのルールを自分で作ってみよう（振り返り）→⑤クラスでルールを決めよう（一般化）→決めたルールでハンドボールをしてみよう（応用）」を意識した構成とした。

○3次 ルールについて振り返る（1時間）

「第3次 ルールについて振り返る」は1時間で構成されている。第1次、2次をもとに「ルールの意義」についての考察を想定している。3次で構成される単元のうち、最も中心となるのが、第2次である。第2次を構成する4つの授業の指導計画が以下である。

2 単元「オリジナルルールを作ってみよう」の具体－「第2次 ルール作りを体験する」の場合－

(1) 授業「ルールを意識してハンドボールをしてみよう」(1/4時間目)

目標：ハンドボールのルールを理解し、競技を行うことができる。

ハンドボールのルールを意識し、よりよいハンドボールの在り方について自分なりの考えを持つことができる。

○授業の流れ

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	1 ハンドボールのルールを確認する。 ○ワークシートのルールを確認する。 ○怪我防止のために準備体操をする。	1 本時で使用するワークシートの配布とハンドボールを行うため、準備体操を行う。 ○準備運動の前にワークシートの確認を行う。 ○ワークシートの記述と運動の2つの場面の切り替えを意識する。 ○通常の準備体操と肩回りのストレッチを多めに取り入れることで怪我防止につながる。
展開	ルールを意識してハンドボールをしてみよう	
終結	2 ハンドボールの試合を行う。 ○経験者と未経験者でチームを分けてハンディキャップなしでオフィシャルのルールで試合を行う。 ○前後半10分の計20分間で試合を行う。 3 本時のまとめ ○ワークシートに試合の振り返りを行う。	2 ハンドボールの試合を行わせる。 ○試合中は、競技規則に則って審判を行う。 ○怪我がないように観察を行う。 3 ワークシートに試合の振り返りを行わせる。 ○ここでは、ハンディキャップなしで試合を行ったため経験の有無で勝敗に差が生じることが想定される。 ○勝敗の背景を意識させながら、体験したことを元にした振り返りを書かせる。

(2) 授業「みんなが楽しめるハンドボールのルールを自分で作ってみよう」(2/4時間目)

目標：全員が納得できるハンドボールのルールを検討することができる。

ルールの役割について理解することができる。

○授業の流れ

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	1 前時の試合での感想を発表する。	1 ワークシートに書いた感想を発表させる。 ○発表を通して、人によって感じ方が多様である点に気づかせる。
展開	みんなが楽しめるハンドボールのルールを自分で作ってみよう	
終結	2 「みんながハンドボールをおもしろいと感じるためにはどんなルールが必要か」について検討する。 ○個人での活動 ○グループでの活動 3 本時のまとめ ○検討した意見をワークシートに書く。	2 検討させるルール(12項目)を提示する。 ○個人とグループの2つの場面で考えさせる ○ルールには、ゲームの前提となるルールと明記はしないがマナーとして守られるルール(この際、スポーツマンシップ等と関連があることも含む)があることに気づかせる。 3 自身の意見、班の意見をワークシートにまとめさせる。

(3) 授業「クラスでルールを決めよう」(3/4時間目)

目標：自分の意見を発表して、話し合うことができる。

○授業の流れ

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	1 前時で検討したルールを発表する。	1 検討したルールを発表させる。 ○各班のルール共有させる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 60%;"> クラスのルールを決めよう </div>		
展開	2 ルールについて話し合う。 ○1人で意見で話し合いを行う。 ○各チームから司会者、書記をださせる。	2 12個のルールをどのようにアレンジするか促す。 ○生徒の話し合いに口出しはせず、趣旨がずれた場合だけ修正する。タイムキーパーは授業者が行う。
終結	3 本時のまとめ ○クラスのルールを決める。	3 クラスの意見を決めさせる。 ○時間内にクラスのルールを決定させる。

(4) 授業「決めたルールでハンドボールをしてみよう」(4/4時間目)

目標：決めたルールで試合を行い、ルールの意義に気づくことができる。

○授業の流れ

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	1 前時で決まったルールの確認と準備体操を行う。 ○怪我防止のために準備体操をする。	1 ルールの確認と準備体操を行う。 ○ワークシートを使用する。 ○通常の準備体操と肩回りのストレッチを多めに取り入れることで怪我防止につながる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 60%;"> 決めたルールでハンドボールしてみよう </div>		
展開	2 オリジナルルールを活用して試合を行う。 ○前後半10分の計20分間で試合を行う。	2 ③で行った試合と本時で行った試合の違いについて考えさせる様に声かけをする。 ○試合中は、オリジナルルールに則って審判を行う。 ○怪我がないように観察を行う。
終結	3 本時のまとめ ○試合の振り返りを行い、発表する。	3 ワークシートに試合の振り返りを行わせ、発表させる。

3 評価

ここでは、本授業の評価について考察を行う。まず、評価の資料として用いるのは、第3次⑦で用いるワークシート（「単元全体を通して、ルールに対する考えはどう変わりましたか？」における生徒の記述である¹⁰⁾。

表4は、ワークシートの記述を評価するためのループリックである。評価規準は、「ルールに関する記述がなされているか」、「具体例を用いて記述されているか」、「将来の展望があるか」の3つ

であり、右列にある評価規準をより重視する項目とし、5段階評価とした。また、基準としては、まず、評価1「ワークシート記述がない、ルールに関する記述がない場合」、評価2は「ルールに関する記述がある場合」、評価3は「ハンドボールのルールを用いて記述されている場合」、評価4は「ハンドボールのルール以外の身の回りのルールを用いて記述されている場合」、評価5は「これからの生活でルールの活用が具体的に考えられている場合」とした。

表4 単元「オリジナルルールを作ってみよう」のループリック

時数	ルールに関する記述がされているか	具体例を用いて記述されているか	将来の展望があるか
評価5	○	○	これからの生活でルールの活用が具体的に考えられている
評価4	○	ハンドボールのルール以外の身の回りのルールを用いて記述されている	×
評価3	○	ハンドボールのルールを用いて記述されている	×
評価2	ルールに関する記述がされている	×	×
評価1	記述なし、関連なし	×	×

(筆者作成)

想定される各段階の作品として評価5、評価3、評価1の例を提示する¹¹⁾。なお、記述例は筆者によるものである。

○評価5

ここに位置づく生徒の作品は、ルールに関する記述があり、授業内容（ハンドボール）のルールから自分の身の回りのルールに置き換えて考えており、これからの生活でルールの活用が具体的に考えられている記述がみられるものである。

<記述例>

ルールは守らされているものではなく、自分たちの自由や安全のためにあり、そのルールも自分たちに合ったルールに変更することができる。これから学習する憲法もルールであり、憲法改正のニュースなどあるので政治に参加して自分たちにあうルールに変更できるのではないかと思った。

○評価3

ここに位置づく生徒の作品は、ルールに関する記述があり、授業内容（ハンドボール）のルールを用いた考察が行われている記述である。評価3に位置づき、また、平均に位置づく記述例として位置付けている。

<記述例>

ハンドボールをしてみてルールは守らされているものではなく、自分たちの自由や安全のためにあり、そのルールも自分たちに合ったルールに変更することができる。

○評価1

この評価は、ルールに対する関心が読み取れない場合、多くは無回答の状態に付けている。

V 本研究の成果と課題

本研究の成果は、2点あげることができる。

1点目は、教科横断型の授業を開発するにあたり、「ルール」「決まり」に着目し、「社会科」と「保健体育科」の中学校における学習指導要領や教科書の分析した結果、教科の特質による「ルール」や「決まり」の扱いの違いを明らかにした点である。

2点目は、社会科と保健体育科の教科横断型授業を提案した点である。小学校と異なり中学校では教科担任制となり、他教科との連携は難しい状況にある。しかし、最終的なゴールは共通する教科も多く、また、教科横断型をすることで1つの視点でしか考えられなかったものが多面的に物事を考えることが可能となる。本研究ではこのことを具体的な単位として提案することができた。また、今回は、社会科と保健体育での連携についてまとめたが、他の教科についても同様であると考えられる。本研究の方法により、社会科と保健体育科以外の教科においても、教科横断型授業の可能性が示唆されたといえる。

今後の課題は、2点あげることができる。

1点目は、教科横断型の授業の開発である。今回は社会科と保健体育科で「ルール」「決まり」の教科横断型の授業開発を行った。他教科と連携することで広がる知識が存在する。全教科を連携すればいいというわけではないが、連携することで生徒の学習の幅が広がるのならば様々な教科で教科横断型の授業を開発することが必要である。

2点目は、理論化にとどまり実践まで至っていない点である。今後は実践を行い、開発した単位による「ルールについて生徒の意識の変化」を明らかにし、社会科と保健体育科の連携の在り方を考える上でのエビデンスを整理していきたい。

(引用)

- 1) 文部科学省著『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）総則編』、2018年、東山書房。
- 2) 湯口雅史「体育における教科横断型学習のこれまでとこれから-“コンテンツベース”から“コンピテンシーベース”へ」、体育科教育、0913-3933、大修館書店、2019年、pp. 22-25。
- 3) 社会科と保健体育科の特徴を導くための分析対象は以下である。
 - ・文部科学省著『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）社会編』、2018年、東洋館出版社。
 - ・文部科学省著『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）保健体育編』、2018年、東山書房。
 - ・『新編 新しい社会 公民』、2017年、東京書籍。
 - ・『中学校社会 公民 ともに生きる』、2018年、教育出版。
 - ・『新編 新しいみんなの公民』、2016年、育鵬社。
 - ・『新編 新しい保健体育』、2019年、東京書籍。
 - ・『新 中学保健体育』、2020年、学研。
 - ・『保健体育』、2020年、大修館書店。
- 4) 「体験的な学習」と「知識的側面」、「価値的・態度的側面」、「技能的側面」の関係について、井上は以下のようにまとめている。

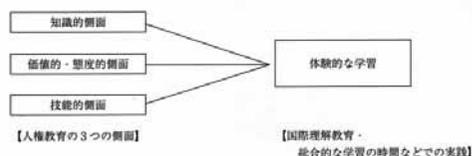


図. 人権教育の3つの側面と体験的な学習（抜粋）

井上奈穂「体験的な学習を踏まえた人権感覚の育成-「主権者意識を高める教育の充実のための出前授業」を事例に-」、鳴門教育大学研究紀要、第35巻、2020年、pp. 81-92。

- 5) ヨーロッパ評議会の人権教育総合マニュアルでは、「体験する」、「報告する」、「熟考する」、「一般化する」、「応用する」の5つの活動を学習サイクルとして示している。ヨーロッパ評議会（著）・福田弘（訳）『コンバシット（羅針盤）子どもを対象とする人権教育総合マニュアル』、2009年、pp. 39-57。
- 6) ルールについては（公財）ハンドボール協会HPを参考にした。（公財）日本ハンドボール協会『ハンドボール競技規則2020年版』

http://www.handball.or.jp/rule/doc/2020competition_rule.pdfh（2021年3月15日確認）
- 7) ハンドボール経験者へのアンケートによるとハンドボールを始めた時期は、中学校から最も多く46.3%であった。
- 8) 経験者へのアンケートには、「違反をして相手ボールになった場合、ボールを所持しているチームの違反に対してレフェリーがフリースローを判定した場合、ボールを持っていたプレーヤーは、相手チームがすぐにプレイできるよう、直ちに床にボールを落とすか、置かなければならない」とした。
- 9) 経験者へのアンケートには、「コートレフェリーの笛の合図から3秒以内に、ゴールに向かって7mスローを実施しなければならない」とした。

10) 第1次で用いるワークシート①(「ルールについて」)の記述は、学習への取り組み状況を把握する目的で扱う。

11) 評価基準は5段階にわけている。

国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校社会 令和2年3月』, 2020年。

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_mid_shakai.pdf (2021年3月15日確認)

<参考文献>

- 平野裕太「中学校社会科における政治的判断力の基礎の育成-他教科との連携を踏まえた社会科公民的分野の導入単元の授業開発-」, 鳴門社会科教育学会, 34号, 2019年, pp. 41-50.
- 阿部生雄著『近代スポーツマンシップの誕生と成長』, 2009年, 筑波大学出版会。
- 門脇厚司著『社会力を育てる-新しい「学び」の構想』, 2010年, 岩波書店。
- 木村草太著『ほとんど憲法 上下 小学生からの憲法入門』, 2020年, 河出書房新社。
- ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウエンガー (著), 佐伯胖 (訳)『状況に埋め込まれた学習-正統的周辺参加-』, 1993年, 産業図書株式会社。
- 中平一義 (編), 村松謙 (法律監修) 著『法教育の理論と実践 自由で公正な社会の担い手のため』, 2020年, 現代人文社。
- 奈須正裕著『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブック-資質・能力を育成する15の実践プラン-』, 2017年, 明治図書。
- 奈須正裕著『「資質・能力」と学びのメカニズム』, 2017年, 東洋館出版社。
- 広瀬一郎著『スポーツの教科書シリーズ 新しいスポーツマンシップの教科書』, 2014年, 株式会社学研教育出版。
- 山崎聡一郎著『こども六法』, 2019年, 弘文堂。